

## 尾瀬には秋風が吹いていた

コロナウィルスのデルタ株は、感染力の強さもあって、世界中で再拡大の様相を呈しています。秋には海外旅行が可能か、という淡い期待も急速にしぼみつつあります。

パラリンピックの理念は「失われたものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ」です。いまさら年寄り、政治の貧しさを嘆いてみても、地球温暖化を心配してみても仕方ありません。いまは残された少ない時間をどのように生きるか、真剣に考えるときです。世間や家族への義理はもう十分果たしました。いまは気兼ねなく自分のためだけに生きようと思います。

週末の朝、目が覚めて窓の外を眺めると久しぶりの青空です。無性にどこかへ出かけたくくなりました。しばらく考えて尾瀬に行くことに。湿原の風に揺れる野の花に会いたくなっ

たのです。

尾瀬は太平洋側と日本海側の境界付近に位置し、至仏山(二、二二八m)や燧ヶ岳(二、三五六m)などの山に囲まれている本州最大の湿原で、二〇〇七年には日光国立公園の一部から分離され尾瀬国立公園に指定されました。豪雪地帯で厳寒地でもある厳しい環境の中で生き抜いている植物には、力強さとともに楚々とした美しさが満ち溢れています。

中央高速と関越道を結ぶ圏央道ができて、尾瀬は山梨からだいぶ近くなりました。朝六時に車で山梨を出発、九時半には尾瀬の麓の片品村戸倉に到着しました。この駐車場に車を置いて、乗り合いバスで鳩待峠に向かいます。

この峠はかつて村人が炭焼きや木出しのため利用した峠です。彼らは冬の間、山中に小屋を作って寝泊まりをしており、春になって山々の雪が溶け始め、キジ鳩が鳴きだすと、

山仕事を切り上げ、山を降りて行きました。そのため、「鳩待峠」と呼ばれるようになったそうです。

概略図の左下のスタート地点が鳩待峠です。ここから尾瀬ヶ原に降り、原を横断して赤田代の温泉小屋に





一泊します。翌日は白砂峠を越えて尾瀬沼に出て、さらに三平峠を越えて大清水に着くまで、全行程約二十七キロの歩行距離です。赤い線で示したのが今回歩いたコースです。鳩待峠から川上川の沢筋に沿って

約一時間くだると、もう尾瀬ヶ原の一角である「山の鼻」に着きます。ここには尾瀬の自然保護に取り組んでいる山の鼻ビジターセンターがあり、いろんな情報を仕入れられます。

また至仏山荘初め、たくさんの山小屋があり、カレーライスやラーメンの食事類、かき氷から生ビールまで売っています。アサヒスーパードライの黄色い看板が目を引きますが、ここから先が長いのでビールは昼食までじっと我慢です。五百円の花豆ソフトクリームをいただきました。

鳩待峠からずっと樹林帯の中の道でしたから、ここに来て一気に視界が広がります。綿雲のような雲が真っ青な空に浮かんでおり、尾瀬はもう秋の気配が濃厚です。気温も正午近くで十九・五℃。さわやかな風が吹いています。

七月のニッコウキスゲの季節は木道が渋滞するほどの人が押しかけるそうです。八月の尾瀬の人気はそれ



ほどでもありません。

まずはなだらかな稜線を持つ至仏山の眺めです。中央の尾根伝いに登山道が見えますが、この登山道は山には珍しく登りの一方通行です。急

坂で滑りやすい蛇紋石に覆われているため危険であるというのがその理由です。さらに最近では登山道周辺の植生破壊が問題になっています。登山者が登山道をそれて植生の中に



踏み込むことと、それをきっかけとした流水の浸食作用が原因です。

至仏山は主な構成岩石である蛇紋岩が強いアルカリ性をもっているため、森林限界が低く襟高が二千メートル足らずにもかかわらず、広い亜高山帯草原を有しています。この草原は人間の踏み込みに弱く、すぐに植生破壊につながりかねません。登山客のすれ違い時の踏み込みを防ぐ



ための一方通行の意味もあるのでしよう。

さてこの時期の尾瀬ヶ原の主役といえば、まず挙げられるのが尾瀬水菊です。花径は五十センチほどでそれほど高くはありませんが、四〜五センチの大柄な黄色の花輪を上向きにつけますので、よく目立ちます。

家族連れが「タンポポが一杯だ」と言って通り過ぎましたが、よく見れ



ば違いは明白です。

もう一つの主役は沢桔梗です。沢のような湿地に多い桔梗科の植物です。長さ一メートルにも及ぶ長い茎に紫の花をたくさん着けて、なかなか人を魅了しますが、花言葉は「高



貴・乙女の魅力」ですが、毒草です。横溝正史の長編推理小説『悪魔の手毬唄』では「お庄屋殺し」の名で登場します。人を殺せるほど毒性が強いのもかもしれません。

きれいな花と乙女、どちらも表向きは可憐ですが、実は毒を隠しているというのには人生の教訓です。

尾瀬の魅力の一つは広い湿原に点在する池塘です。池塘は尾瀬の進化を知る上でも貴重な存在なのだそうですが、中にところどころ浮島と呼ばれるものができています。

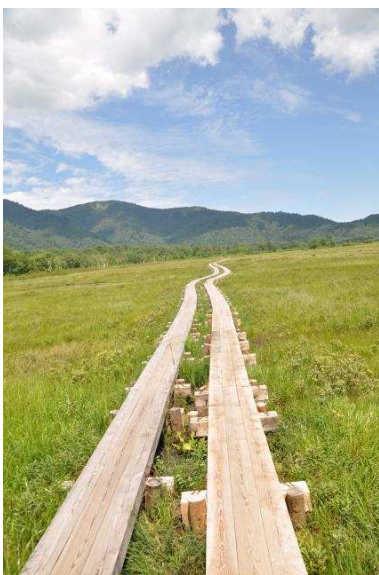
これは中州のように底から盛り上

がってできているのではなくて、実際に池の上にプカプカ浮いているものです。泥炭層の一部が強風の影響で岸から離れて水の上に浮いているのだそうです。

これは植物自体の浮力と植物の死骸が腐って土にならず、死骸のまま存在しているという泥炭層特有の浮力が関係しているようです。

また池塘は数千年から数万年という長い年月をかけて高層湿原ができる過程において川の流れの変化や泥炭層の溜まるスピードの違いでできてゆくものだそうです。

余計なことですが、池塘といえ





思い出すのが南宋の大儒学者・朱子が詠った「偶成」という詩の中に出てくる「池塘春草の夢」というフレーズです。

少年易老學難成  
一寸光陰不可輕



未覺池塘春草夢  
階前梧葉已秋聲  
青春の短さと時間の大切さを詠った詩ですが、この歳になって身に沁みます。  
それはさておき、池塘の水面に



浮いているのはヒツジグサです。世界で一番小さな花を咲かせるスイレンです。

なんでヒツジ(羊)の名前が付いているのか疑問でしたが、植物図鑑によると未の刻(午後二時)になると花が開くのが名の由来とありました。



しかし私が見たのは午前中ですが、花はすでに開いていました。睡蓮の仲間ですから夜は花びらを閉じて、明るくなると花を開くといったぐらいの解釈でしょうか。

さて沢桔梗、尾瀬水菊に次いで目



立つのがアブラガヤ(油萱)です。尾瀬に限らず夏の高原を散策していると、湿りけのあるところでひとときわ高い果穂をのばしているアブラガヤをよく見かけます。

たくさんの果穂がたれ下がるようすは、ちよつと稲穂を連想させますが、イネとちがってアブラガヤはカヤツリグサ科に分類されます。名前は花序が油くさいにおいがあることから付いたと言います。鼻に近づけてみました。やはりかすかに油のようなおいがありました。

竜宮あたりまで来ると燧ヶ岳が間近に見えてきました。燧ヶ岳は、五



く十万年前の火山活動で形成されたものです。尾瀬沼や尾瀬ヶ原は一万年以上前の燧ヶ岳の噴火によって只見川上流がせき止められてでき上がったものです。至仏山と共に尾瀬のシンボリックな存在といえます。

若い時には至仏山と燧ヶ岳を一日で両方登ったものですが、いまは片方だけでも登る元気はありません。若いころ、無理をしても登っておいてよかったと今は思います。やりたいことはやりたいと思うときにやっておかなければ、後からではやりたくてもできないということになります。

高度経済成長期でモーレツがもてはやされた時代、年に二十日間の有給休暇を全部使い切ることは勇気がいることでした。畠山みどりが歌う「出世街道」という唄を酔っぱらうとよく歌っていました。他人に好かれていい子になって、落ちてゆくときや独りじゃないか」という歌詞は今でもよく覚えていています。星野哲郎の作詞ですが、最後は自分が大切なんだよと、温かく励ましているような気がします。

さて、話がだいぶそれましたが、秋の山野草といえば皆さんは何を思い浮かべますか。私がすぐ思い浮かべ

るのはワレモコウです。

吾木香すすきかるかや秋くさのさびしききはみ君におくらむ

私の好きな若山牧水の歌です。ひとつ年上の人妻、園田小枝子とのロマンスを詠った歌集「別離」のなかにあります。しよせん豊穰の果実など実らぬ、あとは枯れてゆくだけの秋の草。牧水は人妻との恋を、その寂しい秋草になぞらえ、「さびしききわみ」と詠ったのでしょう。「吾木香」という花の名には、「我も恋う」をかけています。



同じ詩集の中には

秋立ちぬわれを泣かせて泣き死なす石とつれなき人恋しけれ

という、なんとも切ない歌もあります。小枝子は何回逢瀬を重ねても最後の一线を越えようとしません。男から見れば石のように冷たい女です。しかし小枝子は人妻で二人の子供までいたのを隠して逢瀬を重ねていたのです。女は怖いですね。

湿原の可憐な花から話がそれてしまいました。ここからはよく目につ



いた花を列挙しておきます。

左上の写真はミヤアキノキリンソウ（深山秋麒麟草）です。湿原を黄色く染める秋の代表です。「キリンとは花が穂状に長く付く姿を想像上の動物の麒麟に見立てたもの」といいますがピンときません。花枝の先に黄色い花を輪上に咲かせるので、黄輪草ではないかと思えます。ついでにベンケイソウ科に属するキリンソウとキク科に属するアキノキリンソウは全く別の花です。

次に紹介するのはオセヌマアザミ



（尾瀬沼薊）です。ご覧のとおり葉にはするどい棘があり、素肌で触れるとかなり鋭い痛みが走ります。花色が淡いピンクで、咲いている花の下に何個か蕾が付くのが特徴です。

もうひとつ私が尾瀬ではじめて見た花を紹介します。チョウジギク（丁字菊）です。花よりもむしろその下にある白い毛が密生した花柄のほうがよくめだつ植物です。





調べてみたら、チョウジギクは主に日本海側の多雪地に分布し、雪が残るような沢沿いの草地に見られるということでした。

尾瀬の冬は零下三十度℃近くに気温が下がることもあります。この中で植物は冬を越さなければなりません。多くの植物は厚い積雪の保温効果をうまく利用して生き延びます。チョウジギクはその代表ともいえる植物です。

次の写真はコオニユリ（小鬼百合）です。花粉には強い染色力があり、蜜を求めてやって来た蝶が、羽をオレンジ色に染めて飛び立って行きます。



た。後ろに強く反ったオレンジの花はクルマユリと似ています。クルマユリは林の中に咲き、葉が茎の中ほどに放射状につくのに対し、コオニユリは湿原の中に咲き、葉は一枚ずつ方向を違えてつきます。球根は昔から食用とされてきました。スーパーマーケットで売られている「ゆり根」はコオニユリの球根です。

次はトモエソウ（巴草）です。名前のとおり花びらが巴にねじれています。



花も草丈も大きく、雄しべが多く長いのでよく目立ちます。

この他にもたくさんのお花に出会いましたが、全部紹介するわけにもいきません。植物を専門に研究したわけでもありませんし、昔買った千二百



円の「ポケット図鑑・高山の植物」をめぐりながらの写真撮影ですから、名前を同定できる数も限られます。名前が分からない花は、暇なときに町の図書館に出かけて、大型の植物図鑑で調べてみるつもりです。

今夜の宿の温泉小屋が見えてきました。温泉小屋は尾瀬ヶ原の北の隅に位置していて、近くを只見川が流れています。宿の前には尾瀬ヶ原、遠くに至仏山を望み、燧ヶ岳や只見川の二つの名瀑への基地として登山者に人気の宿ですが、なんととっても魅力は温泉です。敷地内に鉄分を含んだ赤い色の源泉が豊富に湧き出しています。源泉の温度は約二十度で加熱しています。

久しぶりに天気が良いので、宿泊客であふれかえっていると思います、恐る恐る宿泊可能か訪ねたのですが、案に相違してガラガラです。私を含めて九人しか泊り客はいませんでした。文字通り肩の荷を降ろして、ビー

ルロング缶で喉を潤しました。残念だったのは、普段は男女二つの浴槽を利用するのですが、客が少なすぎて一つの浴槽しか沸かさず、男女で時間分けして利用することになったことです。男女四十五分刻みですので、長湯が好きな私には、気がせいりゆっくり入ってられません。

翌日は五時に起床。小屋の前の湿原を散歩しました。気温十六℃、今日もいい天気にも恵まれそうです。山の中腹に朝靄がたなびいていて、なかなか風情があります。

今日は尾瀬沼を経由して、大清水まで歩き、大清水からはバスで車を置いた片倉の駐車場まで戻る予定ですが、バスの最終が三時半ですのでそれまでに行き着かなければなりません。

尾瀬沼は尾瀬ヶ原より二百メートルほど標高が高いので、尾瀬沼に出るためには峠越えしなければなりません。尾瀬ヶ原を離れて、燧ヶ岳の

裾を捲くように樹林帯の中を緩やかに登ってゆきます。

まず目に付いたのが、オオバタケシマラン（大葉竹縞蘭）のラグビーボールのような赤い実です。タケシマランは山梨の山地でも良く見かけますが、オオバは珍しい。一番の違いは花





のついている柄が折れ曲がっていること  
 です。写真の赤い実のついている柄を  
 よく見てください。柄は途中でくの  
 字型に屈曲しているのが分かります  
 ね。  
 おいしそうな実ですから、ひとつ口



に含んでみたかったのですが、尾瀬は  
 国立公園で採取禁止ですのでやめて  
 おきました。  
 三メートルほどの木で、赤い実をた  
 くさんつけているのが目に付きまし  
 た。最初は山梨の山でも良く見かけ



るガズミの実かと思いましたが、よ  
 く見ると実が卵形で球形に近いガマ  
 ズミと少し違います。オオカメノキか  
 ケナシヤブデマリあたりかと思当を  
 つけましたが……。いずれにしても  
 ガズミ属ですので大勢に違いはない  
 でしょう。  
 いずれにしても、尾瀬は花の季節  
 から実の季節に移りつつあることを  
 感じさせてくれます。  
 そう言えば、七月の尾瀬はニッコウ



キスゲの大群落が見られることで人氣がありますが、この花もいまは実の季節です。大きな実に取り付いているのはカミキリムシの一種でしょうか。



尾瀬ヶ原から二時間ほど燧ヶ岳の裾を登り、白砂峠を越えて、やっと尾瀬沼が見えてきました。  
燧ヶ岳の噴火によって沼尻川がせき止められてできた尾瀬沼は周囲

約七キロメートル、標高一六五〇メートルの高さにあります。湖岸には針葉樹林帯や湿原が広がり、独特の風景をかもしだしています。沼辺から水生植物が沼の深い方に向かって繁殖していく姿が見られます。徐々に湿原に移行する途中で、いずれは尾瀬ヶ原のような姿になるでしょう。現在もっとも深いところでもメートル程度の水深しかないそうです。

尾瀬沼を後にすれば三平峠を越えて大清水まで単調なくだりが続きます。朝七時に温泉小屋を出発し、大清水に着いたのが午後三時でした。休憩時間も含まれますが八時間も歩いた勘定です。大清水にある山神社に丁重にお参りし、今回の無事を感謝しました。

花の写真を撮るには、絶好の時期というわけではありませんが、いくつかの珍しい花に出会うことができました。花の名前の最初にオゼと付く



ものがたくさんあることから分かるように、尾瀬の植物は高地の湿原という特異な環境の中で進化を遂げてきました。

一般的に野の花は園芸の花と違って小さく目立たないものも多いのですが、一つひとつの名前やその特徴を知ってゆくとおしさが一層増してきます。

若い頃は花など見向きもしませんでした。国家とは、宗教とは、人間とは、と抽象論理を振り回すおなしさに気づいたとき、小さな野の花が向こうから呼びかけてきました。

すでに人生の晩年を迎えた私で

すが、厳しい環境の中で必死に生きている野の花を想うと、いま少し何事かに取り組んでみようという意欲が湧いてきます。

fujizakura

※登場する花の名前は、植物図鑑などで調べましたが、似たような花がたくさんある場合もあります。専門家ではありませんので、間違いに気づかれた方はメールをいただければ幸いです。すぐに訂正します。